

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：16401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K02441

研究課題名(和文) 社会に開かれた古典学習に向けた古典読解力の再定義と授業モデル・評価システムの研究

研究課題名(英文) Research on redefinition of classical reading comprehension skills, lesson models, and evaluation systems for classical learning open to society

研究代表者

武久 康高 (TAKEHISA, YASUTAKA)

高知大学・教育研究部人文社会科学系教育学部門・教授

研究者番号：70461308

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、自分や社会にとっての古典の意義が分からず、生徒たちの学習意欲が低いという高等学校国語科の長年の課題を解決するため、次のことを行った。(1) 実践的な場面で古典を活用する水準を含んだ古典読解構造のモデル化。(2) 全国の高等学校で実践可能な授業モデル・評価指標の開発。成果は以下の通りである。(1)のモデル化では、特に間テクスト的な読みをもたらす「情報のリンク」能力の重要性を指摘した。(2)では「古典教材と自分自身とを関連付ける」ための「評価基準」、及び「古典との対話を生み出す」ための「授業モデル」「評価規準」「教材選択の基準」についてそれぞれ開発した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの古典教育研究において、実践的な場面で古典を活用できる力の育成を目的とした研究はほとんどなく、そのためこうした「授業モデル」や叙上の学力を評価する枠組みや指標が未開発であった。そこで本研究では、実践的な場面で古典を活用できる力の育成に関わって、全国の高等学校で実践可能な「授業モデル」や「評価指標」の開発、及び「教材選択の基準」について提案した。このことによって、より多くの高等学校での授業改善に資することができると思う。ここに本研究成果の学術的意義や社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：In order to solve the long-standing problem in high school Japanese language classes of “students having low motivation to learn because they don't understand the significance of classical works for themselves and society”, the following was done. (1) Modeling of the structure of classical reading comprehension, including the level of “utilizing classical works in practical situations”. (2) Development of a teaching model and evaluation criteria that can be put into practice in high schools across the country. The results are as follows. In (1), we pointed out the importance of the ability to “link information”, which leads to intertextual reading. In (2), we developed “evaluation criteria” for “relating oneself to classical teaching materials”, as well as “classroom models”, “evaluation criteria” and “criteria for selecting teaching materials” for “creating dialogue with the classics”.

研究分野：教科教育学

キーワード：古典教育 読解力

1. 研究開始当初の背景

高等学校国語科の長年の課題である「古典に対する学習意欲の低さ」を受けて、新学習指導要領では、自分や自分を取り巻く社会と古典とを関係付けることで、古典の内容や解釈を「自分ごと」化する学習が目指されている。その方向性に間違いはないが、以下の点で問題がある。

- (1)〈実践的な場面で古典を活用できる力〉を育成する観点に欠落しており、「何のために古典を学ぶのか」という生徒の切実な疑問に対する応答としては不十分であること。
- (2)育成する学力を評価する枠組みや指標が未開発のため、十分な学力の形成や定着が望めないこと。

2. 研究の目的

本研究の目的は、〈自分や社会にとっての古典の意義が分からないため、古典に対する学習意欲が低い〉といった、高等学校国語科の長年の課題を解決することである。この目的を達成するために以下のことを行う。

- (1)〈実践的な場面で古典を活用する〉水準（＝社会に開かれた古典学習）をも組み込んだ、古典読解に関わる学力の構造やその内実を明らかにし、モデル化する。
- (2)(1)をもとに、全国の高等学校で実践可能な授業のモデルと評価の枠組みを開発する。

3. 研究の方法

(1)〈実践的な場面で古典を活用する〉水準を含んだ古典読解構造のモデル化については、日本よりも早くコンピテンシー志向のカリキュラム改革を行ったドイツの先行研究や「一般大学入学資格のためのドイツ語科教育スタンダード」をもとに作成する。

(2)(1)をもとに教材を開発し、公立と私立の高等学校で授業実践を行う。そこから授業モデル及び評価の枠組みを開発する。

4. 研究成果

(1)〈実践的な場面で古典を活用する〉水準を含んだ古典読解構造のモデル化について

古典読解構造のモデル化を行うにあたり、ドイツの文学教育における読解のモデル（特に Rosebrock (2020)、Spinner (2006)、Zabka (2005)）や「一般大学入学資格のためのドイツ語科教育スタンダード」(2012)における問題や課題文を参考にした。そこでは基本構造として、「①文字、単語、文の認識」→「②文の境界を越えた局所的な意味コンテキストの形成」→「③テキスト全体についての意味コンテキスト（状況モデル）の形成」→「④慣習化されたパターンへの分類過程でテキストの表現戦略を特定」という読解の流れを定めた。

読者は「文字、単語、文の認識」(①)から「テキストの一部」(②)、さらには「テキスト全体」(③)へと意味内容理解の範囲を広げていく。そしてそのうち②③の理解形成過程では、「テキストの意味論に関わるボトムアップの読み」と「トピックに関する既有知識によるトップダウンの読み」とが存在し、これらの理解に関わる知識として「内容的な知識」と「ジャンルの特徴に関する知識」とがある。このような①～③の読解を経て、読者の中に「状況モデル」が形成されていくのだが、その状況モデルを「各ジャンルのパターン」（ジャンルの）や「定型的なものの方」（内容（主題）的）などの「慣習化されたパターン」へと分類し、そこでの類似点や相違点を探るなかでテキストの特徴（＝表現戦略）を探るのが④の段階である。さらに本研究では、①～④の基本構造と共に、文章理解中に活性化された知識そのものを理解操作対象とする「⑤活性化された知識の解釈、考察、評価」を付け加えた。文学の授業では、テキストを読んで考えたことをもとに自己を振り返ったりすることから、この段階を設けた。ちなみにこの⑤は PISA 調査では読解力に含まれていない。

次に、叙上の読解モデルにおける読解能力を整理した。①～④における読解能力は、PISA 調査における「情報の取り出し」「解釈」「熟考・評価」の能力が基本である。その上で、それらのサブスキルとして、文章間（テキスト内およびテキスト間）を関連付け、そこに意味を見いだす「情報のリンク」能力、登場人物の心情などテキストに明示されていない不確定な情報を理解する「推論」能力、暗示や比喩などの形で表わされる間接的な表現を理解する「間接性の理解」能力、文学テキストに特有の複数の解釈可能性を捉える「開放性の理解」能力をそれぞれ指摘した。また、このうち〈実践的な場面で古典を活用する〉水準で特に重視される能力として、間テクスツ的な読みをもたらす「情報のリンク」能力と文学テキストの持つ多義性と関わり合う「開放性の理解」能力とを位置付けた。以上が本研究で作成した古典読解モデルである。

(2)〈古典の内容を「自分ごと」化し、自分や社会にとっての古典の意義を考える〉資質・能力の育成に向けた授業モデルの構築、評価指標の開発について

本研究では、広島県の高等学校で『更級日記』を、徳島県の高等学校において『枕草子』をそれぞれ教材として実践し、そこから授業モデルおよび評価指標の開発を行った。

(2)-a 『更級日記』

【目的】

古典の内容を「自分ごと」化し、自分や社会にとっての古典の意義を考えるためには、生徒が古典教材と自分自身（あるいは現実社会）とを関連づけるといった「情報のリンク」能力が必要となる。しかしそこでの両者の関連付けのあり方にも、古典世界と自分自身（現代社会）との表面的なつながりを指摘するものから社会的な問題のレベルで関連付けるものまで、いくつかの水準があると言える。そこで本実践を通して、生徒たちが古典教材と自分自身（あるいは現実社会）とをどのように関連付けているのかについて整理し、評価基準を作成する。

【単元の概要】

1-2 時間目：“平安時代における「日記」の役割”を学習し、「日記」には「人々にとって有用な情報を記し、先例として共有できるようにする役割」があったことを確認する。

3 時間目：『更級日記』の題名の由来を考え、そこに〈一人残された老女の日記〉の意が読み取れること、またそうした自己像を持つ女性が過去を想起し書いたのが『更級日記』であることを押さえる。

4-6 時間目：教科書教材（「冒頭」「源氏の五十余巻」）の読解を行い、「物語を読みたいと熱望し、祈る」「それが叶う」という構造が共通していることや、そうした行動が執筆現在の視点から反省されていることを捉える。

7-8 時間目：石坂（2008）をもとに、孝標娘の人生を①～⑮の状況に整理し、各記事が「物語への関心／仏教的見地から後悔」「家を守る者として」「働く女性として」のいずれに当てはまるか考えさせる。

9-10 時間目：『更級日記』の末尾を読解し、作者はどんな悲しみを読者に伝えようとしているか話し合う。

冬休みの課題：現代社会や自分自身と『更級日記』とのつながりを書きなさい。またそれがどんな問題を知ったり、自分や社会を見つめ直すきっかけになったか書きなさい。

11 時間目：単元のまとめとして、生徒が書いた課題と同テーマで大学生が書いた課題を配布し、両者の共通点や相違点について話し合う。「振り返りシート」を記入する。

【評価指標について】

生徒が『更級日記』と自分自身（現代社会）とのつながりを書くパターンはおおよそ次の二つに分類できた。

①古典教材に描かれている心情や行動、状況と自分自身（現代社会）とを直接つなげるパターン

特徴として、古典教材に描かれている心情や状況を自分自身の生活経験をもとに意味付け、現代社会との共通性を判断する読解になっている点あげられる。ここでは古典と自分自身（現代社会）との表面的なつながりは見いだせるものの、それが作品の理解や自分自身（現代社会）を見つめ直したりする読解にはなっていないと指摘できる。

〈例〉「勤行せずに物語に熱中してしまったことを反省する孝標娘」を「マンガに熱中し勉強しなかった自分」と重ね合わせ、「今後は気を付けたい」とするもの、「結婚のために宮仕えを辞めさせられた孝標娘」について、「自分の母も同じく仕事をやめた」とし、「未だに男尊女卑は続いている」するものなど

②古典教材から普遍的な問題や教訓、主題を読み取り、それを自分自身（現代社会）とつなげるパターン

古典教材から読み取った出来事を概念化して捉え、自分自身（現代社会）とつなげている点で①より高い水準の読解と評価できる。だが②の読解は、生徒の経験や近代的な概念を古典教材に持ち込むといった読解を起しがちであり、結果として、現代や自分自身の常識や問題を見つめ直させる働きを古典に持たせることは難しく、生徒たちには自分自身（現代社会）への問い直しが行なわれていないと考えられる。

〈例〉『更級日記』から「後悔する女のストーリー」を読み取り、それを「後悔先に立たず」や「短慮軽率」といった教訓の形で理解し、自分のこれまでの行動と結びつけるものなど。

一方、同じ授業を大学生に行なったところ、次のパターンの解答が見られた。

③古典教材を当時の社会構造や社会的なコードと関係付けることで社会的な課題を見だし、そこから自分自身（現代社会）を問い直すパターン

特徴として、古典教材に描かれている心情や行動、状況を当時の社会構造や社会的なコードと関係づけることで社会的な課題を見だし、同じような構図が現代社会にも見られないか検討していることがあげられる。ここには、一見すると個人的な問題に見えることも、それを生み出した社会の問題（制度や価値観の問題など）として認識していこうとする考え方が根底にあると言える。

〈例〉孝標娘の不幸の原因は、女性をめぐる「社会や制度上の欠陥」が基になっている。しかし彼女は、それを「自分自身でどうにかできたはずのことに求めようとし」、そこで見つけたのが「物語への耽溺」であった。つまり『更級日記』には、〈自らの不幸の要因について、本来は女性をめぐる社会構造的な問題が理由であるにも関わらず、自分の努力不足（物語に熱中し、信仰が疎かになったこと）を理由と考えてしまう女性の姿〉が描かれており、こうした〈社会的な不成功の要因をその人の努力不足にみる〉見方は現代にも見られること。

これらの解答パターンは、①→②→③の順で古典教材と自分自身（あるいは現実社会）との関連づけが深化していると言える。これらを実評価基準とし生徒に自己評価をさせることで、古典教

材と自分自身（現代社会）とをどのように関連付けていけばよいのかを生徒に理解させることができる考える。

【評価基準】

3	2	1	0
古典教材を当時の社会的なコード等と関係付けることで問題を見だし、自分自身と結びつけている	古典教材から現代的な問題や教訓等を読み取り、自分自身と結びつけている	古典教材と自分自身とを直接結び付けている	古典教材と自分自身とが結び付けられていない

(2)-b 『枕草子』「春はあけぼの」

【目的】

(2)-a では、『更級日記』の実践における生徒の文章を通じて、古典教材と自分自身（あるいは現実社会）との関連付けの水準について整理し、評価基準を作成した。ここでは、古典の内容を「自分ごと」化し、自分にとっての古典の意義を考えるための方法として「古典との対話を生み出す授業」を開発し、それをモデル化するべくポイントの整理と評価規準の作成を行う。

【単元の概要】

1 時間目：単元名と学習展開を知ることによって学びへの見通しを持つ。「春はあけぼの」の内容を確認した上で、『枕草子』跋文から執筆動機を確認し、個人→班で『古今集』四季歌を解釈する。

2 時間目：班の解釈へのコメントをもとに四季歌を解釈し、『古今集』と「春はあけぼの」の特徴を捉える。

3 時間目-4 時間目前半：『古今集』の季節の描き方の共通点を探し、「春はあけぼの」と比較することでその特徴を捉え、本単元における「名作」の定義を理解する。

4 時間目後半・5 時間目：「名作」の例として現代の歌詞を読解することで、現代の「名作」のモデルを理解する。

6-7 時間目：作文の材料と構想を考え、手引きやルーブリックを参考に作文を書く。

—作文の提出・教師からのフィードバック・再提出—

第8時（1か月後）：他者の作文を評価する。

【テキストとの対話過程の整理】

古典の内容を「自分ごと」化し、自分にとっての古典の意義を考えるための方法として「古典との対話を生み出す授業」を開発した。テキストとの対話過程を整理すると次のようになる。

(1) テキストの語りとは、あるテーマに関して語り手が社会と対話した結果である

〈例〉「春はあけぼの」について

常識や規範、型というもの（＝テーマ）に関する語り手と社会との対話の結果と捉える

語り手：みんなが認める『古今集』の観念的な美よりも、私は朝焼けの瞬の美が好き

(2) テキストと対話するとは、(1)の対話を読者の頭の中で再構成し、その対話に読者も加わることである

※このように考えることで、古典テキストもあるテーマをめぐる対話参加者の一人にすぎないこととなり、同じく対話の参加者である読者と対等の立場に置かれることになる。

(3) (2)の「読者も対話に加わる」際のポイントは、(1)の対話をいかに「自分のテーマ」をめぐる対話として各学習者が捉え直し、そこに自分の言いたいことを見いだせるかである

〈例〉「春はあけぼの」では、そのジャンルの「型」や「規範」に対する「型破り」な見方を通じて、語り手は季節の新たな美（見方や面白さ）を提示している。こうした「型破り」な作品のことを授業では仮に「名作」と定義した。そして学習者にも、自分が好きな歌詞やマンガなどから（自分にとっての）「名作」を探させ、どのような点が「型破り」で良いのか文章化させる。この活動によって、「型」を破る表現を行う」というテーマで、語り手は「春はあけぼの」を、読者は自分の考える「型破り」の「名作」を、それぞれが提示しているということになる。これが「読者も対話に加わる」ということである。

(4) 上記のように「自分のテーマ」について各自が対話し、それぞれ文章を書く。その際、そのテーマをもとにテキストの批評や自身のふり返りを行うことが重要である

(5) (4)の活動を行うためには、そこでテーマを考えることを通じて生徒自身の「観」（信念的なもの。例えばジェンダー観など）が自覚でき、一方でそのテーマに関するテキスト（語り手）の「観」も比較的容易に読み取れ、両者の「観」の相違を意識化できる、そんなテーマが読み取れる教材を選ぶことである（「観」については難波(2008)を参考にした）

〈例〉生徒Aの場合

【『君の瞳をたべたい』との対話】：一般的な物語が〈病気で余命宣告を受けた明るく人気のヒロインは、最終的にその病気で亡くなってしまう〉のに対し、本作品には〈そのヒロインは通り魔の被害にあって死んでしまう〉という裏切りがあり、それが主人公や読者に〈当たり前前に生きていることについて考えさせる〉という仕掛けになっている。その点で本小説は「名作」である。

このように「自分のテーマ」をめぐる対話を通じて、今まで意識したことがなかった自身の「名作」観について自覚した上で、その「名作」性をめぐって「春はあけぼの」と対話をする。

【自分自身の「観」のふり返り】：自分にとっての「名作」とは、「フツー」（余命宣告されたヒロインものの「型」）に対する「裏切り」があるとともに、そうした「裏切り」を通じて読者に「目を瞑りたくなるような現実について、考えさせ」るなど、〈現実への問いかけ〉をもたらすものだと感じた。

【「春はあけぼの」との対話】：「春はあけぼの」は、〈風景などのありふれたもの〉に目を向け、その美を「断定的に表現している」点で「名作」だと思うが、そうした「他にない新し」さも自分の心にはあまり「刺さらなかった」。つまり、『古今集』が提示する「型」への「裏切り」方に新しさは感じるものの、それだけでは面白くない。

【古典の内容を「自分ごと」化するための、古典との対話を生み出す授業のモデルについて】

以上の整理を踏まえ、古典の内容を「自分ごと」化するための古典との対話を生み出す授業のモデルを次のように作成した。

○教材選択基準

- (1)あるテーマに関して語り手が社会と対話し、その結果テキストが生まれたと考える。
- (2)そこでのテーマは、①生徒自身にとって書きやすいテーマである、②そのテーマを考えることで生徒自身の「観」が自覚でき、テキストの「観」も比較的容易に読み取れる、③両者の「観」の相違を意識化できるものとする。こうしたテーマをめぐって対話している教材を選択する。
- (3)ここで古典教材は、〈自分の「言いたいこと」を発見し、深めていくための対話相手〉として位置づける。

○授業モデル

- (1)古典教材の読解を通じて、そのテキストがどのようなテーマでの対話の結果生まれたのか捉える
- (2)同じテーマをめぐって生徒も対話を行う。その際、同じテーマをめぐって対話をしている他テキストを探し、その特徴を論じる形でも構わない
- (3)そのテーマに関わる自身の「観」を意識化し、さらにテキストに見られる「観」を捉え、両者の相違を理解する。そのなかでテキストを批評し、自分を捉え直す

【評価規準】

上記の授業モデルに対する評価規準は以下の通りである。

○評価規準

- ①自分のテーマをめぐって対話ができている（自分にとっての「名作」の提示）
〈例〉自分が「名作」とする作品がその概要とともに提示されており、それがどんな「フツー」をどう覆したか、作品を知らない人にもわかるように説明されている。
- ②テーマをめぐって、自分が提示した作品と古典テキストとの比較ができている
〈例〉自分が提示した作品と「春はあけぼの」（清少納言）のどちらがより「名作」か、判断した理由とともに示されている。
- ③自分の「観」について省察できている（自分の名作観に関する省察）
- ④表現に一貫性がある
〈例〉全体を通して作品提示や理由説明が一貫しており、文章のねじれもない。

〈参考引用文献〉

- Bildungsstandards im Fach Deutsch für die Allgemeine Hochschulreife (Beschluss der Kultusministerkonferenz vom 18.10.2012)
- Rosebrock, Cornelia & Nix, Daniel (2020): Grundlagen der Lesedidaktik und der systematischen schulischen Leseförderung. Baltmannsweiler: Schneider Hohengehren, 9. aktualisierte Ausgabe
- Spinner, Kaspar (2006) : Literarisches Lernen. In: Praxis Deutsch 200
- Zabka, Thomas (2005) : Typische Operationen literarischen Verstehens. Zu Martin Luther ‚Vom Raben und Fuchs‘ (5./6. Schuljahr). In: Kammler, Clemens (Hrsg.): Literarische Kompetenzen – Standards im Literaturunterricht. Seelze: Kallmeyer.
- 石坂妙子 (2008) 「菅原孝標の娘（更級日記）」西沢正史編『古典文学にみる女性の生き方事典』国書刊行会
- 竹村信治 (2012) 「『伝統的な言語文化』の摺み直し（下）—『伊勢物語』初段、『今昔物語集』「馬盗人」などを例に—」『論叢国語教育学』復刊3号
- 難波博孝(2008)「国語教育とメタ認知」『現代のエスプリ』497号
- 細川英雄 (2019)『対話をデザインする—伝わるとはどういうことか』筑摩書房

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 武久康高	4. 巻 18
2. 論文標題 中等教育における和歌学習の研究(中学校編)：短歌の表現史の整理をもとに	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 論叢国語教育学	6. 最初と最後の頁 40-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 武久康高	4. 巻 142
2. 論文標題 高等学校の古典学習で育成をめざす資質・能力(コンピテンシー)に関する研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 全国大学国語教育学会国語科教育研究：大会研究発表要旨集	6. 最初と最後の頁 177-180
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 武久康高	4. 巻 604
2. 論文標題 高等学校の古典学習に求められる読解力とは 「古典教材と現実世界を関連付ける学習」における生徒の反応をもとに	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 月刊国語教育研究	6. 最初と最後の頁 42-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 武久康高	4. 巻 71(11)
2. 論文標題 文学的コンピテンシーの育成をめざした古典学習：累積的なコンピテンシー獲得モデルの構築・『伊勢物語』「芥川」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本文学	6. 最初と最後の頁 12-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 武久康高	4. 巻 83
2. 論文標題 筆者想定法による古典文学の学習 - 『枕草子』「春はあけぼの」を例に-	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 高知大学教育学部研究報告	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 武久康高	4. 巻 第140
2. 論文標題 「教材の内容や解釈と自分の知見とを結び付け、考えを深める」古文の学習に関する研究 高校生による「振り返りシート」の分析から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 全国大学国語教育学会 国語科教育研究 第140回2021年春期大会研究発表要旨集	6. 最初と最後の頁 79-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 武久康高	4. 巻 6
2. 論文標題 古典との対話をいかに生み出すか - 『枕草子』「春はあけぼの」の実践から考える -	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 高知大学学校教育研究	6. 最初と最後の頁 99-106
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 武久康高	4. 巻 144
2. 論文標題 古典との対話を生み出す授業の開発研究 古典との対話を通じて、いかに自分のテキストを生み出すか	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 全国大学国語教育学会 国語科教育研究 第144回2023年春期大会研究発表要旨集	6. 最初と最後の頁 83-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 武久康高	4. 巻 142
2. 論文標題 高等学校の古典学習で育成をめざす資質・能力（コンピテンシー）に関する研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 全国大学国語教育学会 国語科教育研究 第142回2022年春期大会研究発表要旨集	6. 最初と最後の頁 177-180
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 武久康高
2. 発表標題 高等学校の古典学習で育成をめざす資質・能力（コンピテンシー）に関する研究
3. 学会等名 全国大学国語教育学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 武久康高
2. 発表標題 「教材の内容や解釈と自分の知見とを結び付け、考えを深める」古文の学習に関する研究 高校生による「振り返りシート」の分析から
3. 学会等名 全国大学国語教育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 武久康高
2. 発表標題 古典との対話を生み出す授業の開発研究 古典との対話を通じて、いかに自分のテキストを生み出すか
3. 学会等名 全国大学国語教育学会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------